

牛久：学校周辺に見る自然

第48号 ひたち野西近隣公園(ひたち野うしく小)

2013年1月20日発行

く 水辺公園、秋の動物たち ～冬越しに備えて ⑥鳥類、冬鳥を中心に>

11/8、ひたち野うしく小4年生との水辺公園、秋の観察。今回は冬鳥を中心に鳥の仲間を紹介。

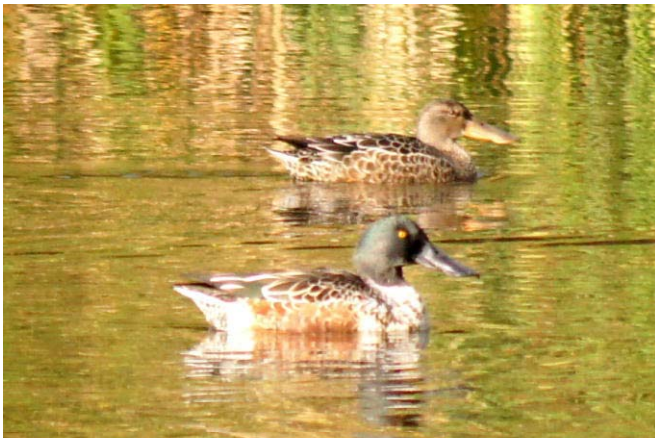


池を泳ぐコガモのオス。冬鳥。

23年度59号でも紹介しましたが、鳥たちの中には、秋に寒い北の国からやってきて日本で冬を越し、春にまた北へもどってひなを育てるものが出て、このような鳥たちを、日本では「冬鳥」と呼びます。(逆にツバメなど寒い冬を南の国で過ごし、春に北の日本にやってきて子育てをするものは「夏鳥」：教科書4年-2、19ページ参考。) 水辺公園ではおなじみのコガモもそう。写真はオスで、メスはじみな色をしています。田んぼの落ち穂や、石についている藻を食べるそうです。

こちら冬鳥で、ハシビロガモ。名前の通りくちばしが幅広く、オスの頭は光沢のある緑色で目立ちます。くちばしにある歯ブラシ状のもので水をろ過し、プランクトンを食べるそうで、生活の仕方うまく合わせてくちばしも進化していますね。

ハシビロガモのオス(手前)とメス(奥)。その名の通り、幅の広いくちばしでプランクトンを食べる。冬鳥。



くちばしで草の種子などをこしとって食べるオカヨシガモ。前2羽がオス。後がメス。冬鳥。

続いて、オカヨシガモ。前2羽はオスで、灰色の体に黒いおしりが目立ち、くちばしは黒。後はメスで褐色の体に黄色のくちばし。草の種子などをくちばしでこしとって食べ、夜の方が、活発に活動するようです。



陸に目を向けると、ジョウビタキがいました。水辺公園では、いつもの年より多く見かけます。写真はメスで、オスはもっと鮮やかな色をしています。火打石をたたく音に似た音を出すことから「火焚(ひたき)」だそうです。なわばりを持ち、よく低い枝やくい先のにとまっていて、人に気がついて一度飛び去っても、待っているとまた同じところに戻ってきます。

えさの確保のためになわばりをもつ、ジョウビタキ。冬鳥。



最後に冬鳥ではありませんが、**ヤマガラ**。ドングリなど堅い木の実が好きで、枝に木の実がなくなると、下に落ちているものも食べます。写真はエゴノキの種子を食べているところですが、エゴの実には殺虫成分のサポニンが含まれていて、人がかむとえぐみを感じ、そこから「エゴ」と名がつけました。ヤマガラはこの堅くえぐい果皮をくちばしで上手につつき、中のおいしい種子を食べます。その一方で冬に備え、食べきれない分を地面や石の間などに埋めてたくわえるのです。そして、春になるとそれが芽を出し、エゴノキの仲間を増やしていくことになるのです。エゴノキはただ食べられるだけでなく、ヤマガラにしか食べられない、目だたず堅くえぐい実をつけることで、種まきをしてもらっているのですね。 【理科支援員 宮内】

エゴの実を食べるヤマガラ。堅くえぐい果皮をくちばしで器用につつき、中のおいしい種子を食べる。留鳥。